

大手門

かつてこの場所にあった大手門は、松本城の城主や上級の来客に利用されていた。。庶民や下級武士が住む城下町と、松本城の城内を分ける門であった。大手門は明治時代（1868～1912）の最初の 10 年間のうちに取り壊されたが、城と最外周の総堀の位置関係は地図（右上）の赤丸で示されている。

大手門は、枳形とその両端にある二つの門で構成されていた。枳形の南西にある門は、枳形と町とつながっており、枳形の北端、天守の方へとつながる、より大きく立派な門である。

枳形は一番外側の総堀でほぼ完全に囲まれており、城壁を突破することは困難であった。そのため、城内に侵入しようとする敵を少数の守備隊で食い止めることができ、ボトルネックとなった。

門を取り壊す際、石材の一部は南側にある千歳橋に再利用された。また、2012 年に行われた発

掘調査では、広場の東側の石垣の一部が発見された。そこから、門の大きさや向きが判明した。また、

1642 年から 1725 年まで統治した水野家と、1726 年から 1869 年まで統治した戸田家の家

紋が入った瓦も発見された。